

五味川純平

人間の條件
下

五味川純平

人間の條件
下

三一書房

人間の條件 下

一九七三年 七月三十一日新装第一版発行
一九七六年十二月十五日新装第九刷発行

著者五味川純平

©一九七三年

発行者竹村一

印刷所暁印刷株式会社

製本所株式会社鈴木製本所

発行所株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(一九一)三三三一〜五番

郵便番号一〇一

振替東京九一八四一六〇番

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

人間の條件

第五
部

第五部

長く尾を曳いて空が唸るのは、砲弾が頭上高く飛び超えて行くのだ。首を竦める必要はない。ずっと後方で誰かの生命が吹き飛ばされるにしても、ここには落ちない。不気味な美しい音が飛び去ることに、濁った空を見上げる。砲弾よ、気紛れを起さないでくれ。ずっと後ろへ行ってくれ。

鞭で風を切るように、短く掛声をかけて来るのは、この近辺へ落ちたがるのだ。そのときには、穴の底に潜るがいい。直撃弾や至近弾でない限り、お前は多分助かるだろう。梶は蛸壺から半身を出して、視界の幅いっぱいに散開して前方の斜面を下りて来る敵を見ていた。定位置につく前には、人生に告別する気持ちにしきりに襲われたのに、戦闘がはじまったら、恐怖感が湧かないのが不思議であった。敵の進撃速度は決して早くはなかった。悠々としているのは、圧倒的な火力の上に勝利を確信しているのかもしれない。つまり、逆に云えば、こちらは早晚潰滅するというこ

とである。間違いなく、死ぬということである。何故それが怖くないのだろうか？ 口が渴くようなこともなかったし、股間が縮み上がるようなこともなかった。奇妙な肚の据りようであった。諦めているのではない。むしろ、迷信に似たものがある。俺は助かるに違いない、何故と云って、人生はそれほど無意味ではないはずだから。そのくせ、迷信の持主は皮肉に嗤うのだ。もし助かるとしても、意味の有無のせいではない。数十万平方メートルの陣地の中の、僅か一平方メートルの梶の蛸壺を、砲弾が選択するかしらないかによってきまる、ただそれだけのことである。

梶は分隊区域を見廻した。草の葉隠れに、あちこちに鉄帽が見える。彼らはまだ生きている。これも、ただそれだけのことである。一時間はおろか、十分後のことを、誰が知ろう！

梶の直ぐそばの蛸壺から、今西二等兵が真っ黒な顔を出して、眼だけが異様に白く光っていた。

「どうしたんですか、味方の砲は？」

敵の戦車群と夥しい散兵は、既に斜面の中腹まで続々と下りて来ているのに、友軍の砲弾は稜線上に盛んに土煙

を上げるばかりである。いまに照準を合せて捕捉するだろう。誰も、そういう期待で、そこからは見えない後方の砲陣の方をふり返った。それにもかかわらず、砲は依然として稜線上に虚しい土煙を上げ続けていた。

「観測班がやられたのかもしれない」

この弾着では、そうとしか考えられないことだ。梶はこの場に似つかわしくないほえみを返した。

「まるで盲射ちだ。話にならない」

待む砲撃がこの調子では、はじまったばかりで、直ぐに終焉が来るものと思わねばならない。戦車群は歩兵と協同して、同じ速度でゆっくりと下りて来る。何の抵抗も感じないらしく、悠々と迫って来る。そのまま続々と寄せて来て、この陣地を津浪のように乗り超えて行きそうに見える。

陣地の何処からか、軽機を点射する音が聞えた。気の早い試射なのだろうが、それを待ちかねたように、小銃分隊からも誰かが射ちはじめた。距離はおよそ六百である。小銃では問題にならないが、不安に耐えられずに射つのだ。

「まだ射つな！」

梶は叫んだ。

「弾を節約しろ。三百以内に入るまで射ってはいかんぞ」

この注意に効き目があったのは、ほんの三十秒かそこらのことだったようである。不安は命令よりも強く作用していた。敵が来る。射たねばならない。射たねば、敵は易々と来るだろう。中つても中らなくても、射ってさえいれば気が紛れるのだ。

「射つな！」

梶は続けて二三度呶鳴ったが、諦めてしまった。

隣の中隊の陣地は敵の方へ出張っていて、既に有効射程に入ったのだろう、何挺かの重機が盛んに射ちはじめた。

その弾着は梶のところからは見えなかったが、有効弾があった証拠に、敵の歩兵は急いで戦車の蔭に隠れた。

隣中隊の射撃は威勢がよかった。敵の前進が停頓したほどだ。

「うまいぞ！」

寺田二等兵は銃把を叩いて、快哉の叫びを上げた。この分では、敵も大したことはない！

敵が戦車だけで突進して来ないのは、日本軍の肉攻戦法を熟知しているのである。歩兵の前進を阻む火力の抵抗が

あれば、戦車で潰す。その戦車に肉迫攻撃をかければ、歩兵が撃退する。そういう互助作用を緊密に保っている。いま、重機の弾では痛痒を感じないはずの戦車群が停止したのは、こちらに重火器の威力がないとわかつているから、悠々と全身を暴露して、専ら歩兵との協調を維持しようとしてゐるらしい。

そのうちに、十四五人の歩兵が戦車群から離れて、隣中隊の突角陣地へ接近しはじめた。遠い梶の位置からは、演習を望見するようによく見える。距離のせいで、あまり機敏な動作とも見えないが、戦い慣れた粒選りの兵士達なのだろう、重機の烈しい射撃の間隙を巧みに縫って、走り、匍い、よじ登っている。殆ど犠牲を払わずに重機の死角へ取りつくことに成功したようである。梶は、はじめ、それが強力な火点を奪取するための決死隊に違いないと考えていた。そうだとすれば、ソ連軍も日本軍も戦法に大した差異はない。必ずしも物量に依存しないのだろうか？ 勇敢な「決死隊」は岩蔭や草むらに見え隠れして、次第に陣地の火点に肉迫している。もう直ぐ手榴弾の投擲距離に入るだろう。重機はそれを知らずに斜面の麓に停止している敵

を射っている。梶は気がなくなった。友軍の重機一挺が潰れば、それだけ自分の死も早く来ることになる。苛立ちは、しかし、それだけではない。演習間に自分が決して成功を信じてはいなかった肉迫の動作が、敵の場合には見事に成功しかけているのがたまらないのだ。こっちにだけ都合が悪く戦闘が進行しては、やりきれない気持である。一中隊のボンクラ小銃手共、あれが見えないのか！

事實は、その陣地の小銃手達も盛んに射ってはいたのだ。けれども、遮蔽物に恵まれた岩山陣地では、一度死角に飛び込まれたら、敵もまたその遮蔽物によって庇護されるのは当然であつた。

梶のところからは約四百である。梶は自分達の正面の敵がまだ動き出さないのを確かめてから、銃の照尺を起して、四百にした。四百は「必中限界」を超えているが、至近弾ぐらいは行くだろう。側面射撃で手榴弾攻撃を牽制するこ

とが出来るかもしれない。

「今西、寺田、四百であっちを射て」

梶は生きた人間に向つてはじめて照準した。据銃するときに、一度だけ、これが戦争なのだ、と、心にはっきり云

った。怨みも憎しみもなしに、これから人間を殺すのである。何の正当な理由もない。また同時に、何の良心の苛責もない。単に、これが戦争なのだ。殺さなければ殺されるから、という確証さえいまはない。射たなくても戦闘は進むものだ。射っても戦闘に変わりがあるわけではない。その目標は、四百メートルも向うを、梶とは無関係に歩いている。関係があるのは、銃口と生命との間に、眼に見えない一本の直線がいつでも任意に引かれ得るということだけである。

寺田と今西は無駄弾を射った。今西が黒い顔をふり向けて、中らんのが不思議だというふうに首を捻った。梶は照準線上に目標を捉えて発射した。目標は横跳びに跳んで、岩蔭に隠れた。四百では命中しないのが当りまえだ。梶は肚でそう呟きながら、第二弾を準備していた。中てるつもりになっている。殺すつもりか？ 誰かがそう訊いたら、梶は答えただろう。殺す必要はない。だが命中させるのだ、このまま彼らが引き返さない限り。世界中で射たれた何千万発かの小銃弾の中の一発分の意味と責任を、梶は無感動に受け流している。ここでは、誰が誰を殺すのではない。

世界中の何千万人かの兵隊の中の一人が、演練された眼を照門にあてがっているのである。梶はもはやヒューマニストでも人間でもない。小銃分隊長で、狙撃手で、自分が生きることと自分の射撃能力だけに托した生物である。

不運な目標は、岩蔭から走り出た。そのとたんに、一度跳ね上って、足を抱えて草むらに倒れ込んだ。梶は冷やかに遊底を動かして、三度目の掘銃をしようとした。そのときに、異変が起った。突角陣地のあちこちから、幾条もの白煙が上りはじめたのだ。死角に取りついていた敵兵が目印の発煙筒を上げたものと合点がいったのは、停止していた戦車群が一斉に不気味な砲身をその方角へ揃えてからである。

戦車群は火蓋を切った。遂に、地獄の饗宴がはじまったのだ。

一瞬のやみ間もなしに山が泣き叫んだ。大気は裂けて、咆え狂った。彼方、旺盛な火力を発揮していた陣地は一面に土煙に蔽われ、死神の怒号を浴びて震えていた。梶は息を呑んで見守った。戦闘の予想も想像も微塵に碎けてけし飛んでしまった。惨烈な戦闘場面を、彼は幾つかの映画で、

視覚と聴覚を通じて経験しているはずであった。だから、砲撃がいかに凄絶であるかということは知っていなければならなかった。これは惨烈というのではなかった。それはただ驚愕であった。このように端的な死と絶望が、その叫喚と乱舞が、突如として、しかも冷静な機械の反復作用によつて、人間の上に吹き荒ぶということが！

どれほどの時間が経つたろう？ 長くとも五分、それ以上ではあるまい。砲撃はやみ、土煙はおさまった。愕きから醒めて見ると、敵の戦列から歩兵が進み出て、蟻のようにその陣地を登りはじめていた。

そこからは、もう、一発の銃声も聞えなかった。

「……やられたんですか？」

と、今西の黒い顔が、抵抗のないのをいぶかるように梶の方へふり返った。

梶は答えなかった。あまりに見事な潰滅と云う他はない。あのようにして戦闘は終るのだ、あのようにして！

隣中隊の潰滅は、土肥中隊が境を接している道路を、敵が易易と進撃して来ることを意味する。それは、取りも直さず、梶の分隊が左側面から簡単に蹂躪されることでもあった。

「……今度は俺達だ」

梶は不得要領な笑いを浮べて呟いてから、大きな声で云った。

「おい、小銃分隊、砲撃がはじまったら、穴の中でキャメルでもしゃぶっている。俺が声をかけるまで首を出すな」声をかけるまで？ そう。もし生きていればだ。あの凄まじい饗宴を見てからは、梶は銃を射つ気もなくなった。無意味である。生きるか、死ぬか、それさえもはや問題ではない。人間の意志や願望が、ここでは全く価値を失っている。生と死が、単に物理的な法則に還元されてしまったのだ。

2

隣中隊の潰滅を目撃した土肥中尉は、齒ブラシ型の髯を慄わせて擲弾筒陣に下知した。

「あいづらをぶっ飛ばせ！ 叩きのめせ！ 一人残らず殺してしまえ！」

擲弾筒陣地は斜面の頂きに、粗末な石垣を防壁として築かれていた。土肥の予想では、そこから飛び出す弾が敵の戦列に落下して破裂すれば、敵は後退を余儀なくされるはずであった。ところが、弾着が届かなかつたり、不発弾があったり、筒の故障で発射出来ないものがあつた。土肥は顔蒼ざめて罵り散らした。その怒声の下で、筒手があわてて弾着を修正したところに、敵の戦線は前進を起した。戦車群の主力が一斉に砲身を向け直して迫つて来るのは、明らかに零距离射撃で殲滅的な打撃を加えるものと見えた。

「来るぞ。用心しろ」

梶は分隊に注意した。用心しろと云つたところで、砲撃がはじまれば敵のなすままである。直撃弾が蝟壺の中へ飛び込まないことを祈るだけではないか。それも、限られた面積の陣地を虱潰しに射たれば、直撃弾からさえ免がれる率は極めて少ないかもしれない。

首を廻して陣地を見渡している梶のところへ、肉攻に出されていた井原が、頭に血の滲んだ繻帯を巻いて走つて来た。

「駄目です、上等兵殿、全然近寄ることが出来ません」

荒い息の下で、声がかすれて踊っていた。

「あの砲撃がはじまる前に退却しようとしたんです。そして、とたんに自動小銃でやられました」

「……赤星上等兵は？」

「即死です」

あの四角い顔の、粗暴な五年兵は、昨日の夕方梶にビンタを食わせたときには、こう簡単に死のうとは思われなかつた。銃弾はどんな男も敬遠しないのだ。戦闘では、憎まれっ子も世にはばかることが出来なかつた。

「……お前だけか、残つたのは」

「よくわかりません。陣地の下まで夢中で逃げて来ました」

井原は腰を浮かしかけた。

「隊長は何処ですか？」

梶は台上の擲弾筒陣地の方を指さした。

「あそこへ行くより、この辺の岩の蔭に隠れている方がいいぞ。……何だ？」

「……戦車が、一中隊を突破して、後ろへ廻るかもしれないです」

梶は後ろを見た。今朝がた、彼が幕舎から戻つて来た、

あの石竹の花の咲き乱れた草地の斜面を戦車が突っ切つてこの台上に現われたら、それこそ文字通りの全滅になる。さりとて、そのことを土肥中尉に報告したところで、これという策の立てようもないだろう。

「岩淵の軽機に上を頼もうか。隊長にそう云つて来てくれるか？」

「行つて来ます」

と、井原が走り出そうとするのを、梶は制めた。

「待て。いまに砲撃がはじまる。あとにしろ」

「大丈夫ですよ。同じ奴に二度は中らんでしょう」

井原は涼しい眼と白い歯で笑つた。

「早く手配した方が……」

声が切れて、井原は走り出した。日ごろおとなしい青年が、意外に勇敢で行動的であつた。彼は許婚の娘の愛の加護を信じていたのかもしれない。梶は井原が蝟壺陣地を斜めに跳んで、擲弾筒陣地の石垣の下まで行くのを見送つていた。もう十秒か十五秒で、彼の姿は台上に消えただろう。そのときに、地獄の咆哮がはじまつたのだ。

瞬間に、陣地全体が震動しはじめ、つん裂くような爆発

音に包まれた。井原がよじ登つていた擲弾筒陣地は最初の集中砲火の焦点にあつた。梶は、石垣の中途、正に井原の場所から、幾つかに干切れた物体が吹き飛ばされるのを見た。信じられぬほど簡単なことだ。梶は愕きも歎きも感じる暇はなかつた。次の瞬間に、梶の顔は、蝟壺の前の盛土の中に埋まつていた。何事が起つたに違いない。そう考えた体の部分は、まだ土の中にあつた。痛みはなかつた。してみれば、中枢神経を冒されてしまつたか、全然無傷であるかである。梶は顔を起し、顔を振り、口に詰まつた泥を吐き出した。眼も鼻も泥だらけである。かすんで、よく見えなかつた。怖ろしさより、気色が悪かつた。助かつたという実感もまだ起らない。早く眼や口の泥を落して、状況を判断せねばならない。蝟壺の底にうずくまつて、水筒の水で眼を洗い、口を嗽いだ。何処もやられてはいなかつた。すると、あれは何だつたろう？ いちどきに全山が破裂したような轟音だったが、感じて、あれは後ろではなく、前であつた。前に落ちた砲弾なら、地表に出ている梶の顔を後ろへ煽つたはずではなかつたか。不審であつた。助かつた理由を確かめなかつた。梶は立ち上つた。陣地全体を叩き

のめしている砲弾の雨も、いまは気にならなかった。自分の穴の罫りを見廻した。これも、時間にすれば三秒か五秒のことだったに違いない。梶の真ん前、二メートル足らずのところに、弾着の大きな穴があいていた。爆風が梶の後ろの急斜面に当ってはね返って、梶の顔を前の土の中に突っ込んだとしか考えられない。梶は体を取り出して腕をいっばいに伸ばした。ちょうど砲弾の穴のふちに触れる。もう一二〇センチ弾着が伸びれば、直撃弾である。梶は阿呆のように笑った。それから、蝟壺の底にうずくまった。もう一二〇センチだ。それを射った戦車は、無修正で次の一弾をこの穴の中にぶち込むだろう。生き抜いてみせる、と、この一年八カ月間力み続けていたことは、何であつたか！ もう駄目である。あと何秒かで、梶の体は井原のように千切れて吹き飛ばされるだろう。梶は泣き笑いに似た表情で顔を歪めた。したいことが沢山あつたのに！ そう思った。何をしたいのかは、わからなかった。あれも、これも、一切である。死の意味が、つまりは生の意味が、この刹那にわかったような気がした。死ぬのが怖いのではなかった。何も出来なくなることが、たまらなく惜しまれ

た。自分は何でも出来ただろう！ すること、楽しむことが無限にあつた。そのどれ一つとして、出来ないものはなさそうであつた。未来は可能性だけで満ち溢れていた。生命とは、おそらく、そのことだろう。それが、この瞬間から、忽然と消えるのだ。生きたかった！ 俺を精いっぱいにかき立ててくれ！

もう駄目である。あと一二〇センチだ。山が揺れている。あちらで爆発、こちらで炸裂、到るところが裂けて、崩れて、震えている。どの一発かが飛び込んで来る。いまだでなければ、その次のが。どれか、一発、必ず飛び込んで来る。もう駄目である。美千子よ、俺はさようならば云うまいと思った。口では云つても、信じてはいなかったのだ。だが、今度こそは、ほんとうにさようならだ。俺はお前に何もしてやれなかった。砲弾の下で、それを悔んでいたことだけは信じて貰えるだろうか？

梶は自分が落ちついているかどうかを確かめたかった。何のためにそれが必要であるかは考えなかった。一人きりで死ぬのだ。取り乱そうが、自若としていようが、死の前で、値打がどれだけ違うのか。それでも、自若とし

ていたかった。この期に及んで、この見栄は、何処から出て、何を目ざしているのか？

梶はキャラメルを一粒取り出して、口に入れた。甘味が直ぐに來た。梶は満足した。自若としているらしい。彼は刹那糞もたれてはいない。落ちついてゐる証拠だ。もう一つその証拠を重ねるためには、悠然と小便が出来るかどうかを實驗してみる必要がある。穴の中で、しゃがんでしてみるか？ 女のようにではないか。悠々と立小便をやれ！

「上等兵殿オ」

と、誰かが呼んだ。

梶は炸裂音の中に、立ち上った。眼の前に片腕が転がっていた。血はなかった。それは黄色くなっていた。右手である。その手は梶に向つて拳手の敬礼をしたことがあるに違いない。梶はその手が誰であるかを識別する義務を感じた。見つめたが、その手が若いのかどうかさえもわからなかった。梶は動揺しているのかもしれない。『上等兵殿オ』といま呼んだ男の手が、これであるような気がしはじめた。梶は落ちつきを自分に納得させるために、その手を拾おうとした。そう思つたときには、梶の顔は再び土の

中に埋まつていた。

梶は暫くそのままにしていた。少なくとも、自分ではうしていたつもりである。下の方から体を動かして安否を確かめながら、ようやく顔を上げた。再び顔を振り、口の中の泥を吐いた。砲弾は前の弾痕と全く同じところに落ちて破裂したのだ。一二センチは、遂に厳然として守られていた。梶は泥だらけの顔で凄まじく笑つた。胸の底から吹き上げて来るような烈しいものがあつた。俺は死なないぞ！ もう俺は絶対に死なないぞ！ 根拠があろうとなかろうと、どうでもよかった。この際の、この動物的な確信は、彼にとつては何よりも貴重なものであつた。

眼の前に転がっていた手は、三メートルほど場所を変えて、猛烈な砲撃の下でまだ可憐に咲いてゐる石竹の花のそばにあつた。梶は自分が戦闘開始前に盛土にさした一輪の石竹の花を探したが、そこは、生々しく赤土が掘り返されていた。

梶は穴の底にうずくまつた。砲撃の震動に身を任せよう。もう俺は死なないのだ。死神に頭の上を素通りさせよう。いくらでも破裂してくれ。もう俺は絶対に死なないのだ。

梶はまたキヤラメルを口に含んで、穴の底から、限られた空を見上げた。そこは灰色に濁っていた。唸り続け、哮え続けていた。

3

蛸壺の底で、両腕に抱えている膝がガタガタ踊るのを、小泉は抑えようがなかった。膝だけではない。腕も脇も、それぞれ別個の生物のように気味の悪い痙攣を起していた。慄えたところでどうなるものでもないというのは理窟である。その理窟を考え出す頭の中では、この地獄責めに似た砲撃が熄むまでもてば、助かるかもしれない、と、一縷の希望が、遙か彼方のたった一つの灯のようにともり続けていた。

蛸壺の中は、全く孤独な、隔離された離れ島であった。

五メートルか十メートルの距離間隔で、今朝一緒に飯を食った仲間達が一人ずつ同じような穴の中にいるのだが、驟雨のような砲撃の下では、完全に音信不通なのである。一人で、黙って、じっと耐えていなければならない。せめて

梶上等兵の声だけでも聞きたいと思ったのに、梶の返事も聞えなかった。ひょっとしたら、もうみんな死んでしまったのかもしれないのだ。小泉は、穴の底から、狭い空へ向って叫んだ。

「上等兵殿オ」

「田代！」

「三村！」

「円地！」

「上等兵殿オ」

誰からも返事は来なかった。呼ぶ声が砲弾で吹き消されたにしても、誰か一人ぐらいは返事をしてよさそうなものだ。もう、みんな死んでしまったに違いない。もしそうだとしたら、この砲撃が熄んで、敵が陣地に乗り込んで来たとき、小泉はたった一人である。そう思ってから、これは確かに眼の前を真っ暗にした恐怖感が、胃の底あたりから衝き上げて来た。紅毛の男達の自動小銃が自分の体を蜂の巣のように射ち抜くだろう。それとも、足か腰を射ち碎いておいて、戦車でゆっくりと轢き潰すかするだろう。そんなことなら、ひと思いに砲弾で吹き飛ばされた方がよか